



Title	東北地方における形象埴輪の組成と配置
Author(s)	東影, 悠
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 431-440
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105059
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

東北地方における形象埴輪の組成と配置

東 影 悠

はじめに

東北地方の埴輪については、畿内の要素が発現するものがあるとともに、関東地方あるいは東海地方の影響を受けたとみられる資料もあり、それらが個別的にモザイク状の展開を示すことはこれまでも指摘されてきた（藤沢 1992、東影 2011）。円筒埴輪のみならず畿内の王権中枢部と同様に各種形象埴輪も生産されたが、一方、独自色がきわめて強い埴輪もあり、その様相は一様ではない。本稿では各古墳での形象埴輪の器種組成と出土状況を通時的に検討し、王権周縁部における形象埴輪の様相とその特質を明らかにしていくこととする。

1. 形象埴輪の組成

東北地方において埴輪が配置された古墳数は約 150 例あり、そのうち形象埴輪が確認された古墳は現在のところ 36 例である（表 1・図 1）。そもそも東北地方の古墳全体のうち、埴輪を配置する古墳数そのものが少ないことに加え、発掘調査数の少なさにもよるとみられるが⁽¹⁾、形象埴輪を配置した古墳は埴輪配置古墳のうち約 20%とかなり少ない。また、形象埴輪配置古墳のうちその大半となる約 80%が中期後葉から後期前半にかけてのものであり、時期的偏在性も大きい。以下では、まず時期ごとの形象埴輪の器種組成の様相をまとめる（図 2）。

前 期 前期の埴輪が確認された古墳では基本的に円筒埴輪と一部で朝顔形埴輪が出土するのみである。雷神山古墳や薬師堂古墳、天神塚古墳⁽²⁾ など、名取川下流域の低丘陵上に展開する古墳では、壺形埴輪を配置するという地域的特徴を示す。

近年、その様相が明らかとなった団子山古墳では、円筒埴輪と朝顔形埴輪とともに形象埴輪の可能性のある破片が出土している。詳細な器種は不明なものの、前期に形象埴輪が東北地方においても生産された可能性がある。団子山古墳の円筒埴輪は、受口状口縁部の特徴などから「松林山古墳系列」（廣瀬 2015）とされる一群につらなる可能性が指摘されている（菊地・菅野 2022、柳沼 2023）。松林山古墳（静岡県磐田市）では家形埴輪あるいは盾形埴輪とみられる形象埴輪も出土していることから、今後の調査によっては団子山古墳においてさらに形象埴輪が確認される可能性も高いであろう。

表 1 東北地方における形象埴輪一覧

番号	古墳（遺跡）名	所在地		墳丘		円筒	朝顔	壺	家	盾	蓋	翳	鞍	甲冑	鳥	人物	馬	犬	猪	不明	時期		
		県	市町村	形態	規模																		
1	雷神山古墳	宮城県	名取市	後円	168																後半	前期	
2	薬師堂古墳	宮城県	名取市	後方	60																		
3	天神塚古墳	宮城県	名取市	方	30																		
4	団子山古墳	福島県	須賀川市	後円	67																		
5	経の塚古墳	宮城県	名取市	円	36																中葉	中期	
6	念南寺古墳	宮城県	色麻町	後円	54				？														後半
7	温南山古墳	宮城県	名取市	円	40																		
8	台町 103 号墳	宮城県	丸森町	造円	25																		
9	瓶ヶ盛古墳	宮城県	白石市	後円	56																		
10	国見八幡塚古墳	福島県	国見町	帆立	68																		
11	金山古墳	福島県	大玉村	円	30																		
12	天王壇古墳	福島県	本宮町	造円	41																		
13	菅沢 2 号墳	山形県	山形市	円	52											？							
14	角塚古墳	岩手県	胆沢町	後円	45																		末期
15	原 13 号墳	宮城県	仙台市	円	15																		
16	富沢窯跡	宮城県	仙台市	窯	一																		
17	大野田 10 号墳	宮城県	仙台市	円	15																		
18	大野田 11 号墳	宮城県	仙台市	円	16																		
19	春日社古墳	宮城県	仙台市	円	30																		
20	鳥居塚古墳	宮城県	仙台市	後円	36																		
21	丸塚古墳	福島県	相馬市	？	？																		
22	原山 1 号墳	福島県	泉崎村	後円	22																	後半	
23	経塚 1 号墳	福島県	会津坂下町	円	25																		
24	久遠壇古墳	福島県	大玉村	円	22																		
25	富田古墳	福島県	郡山市	？	？																		
26	麦塚古墳	福島県	郡山市	後円	27																		
27	塚畑古墳	福島県	須賀川市	後円	40																		
28	下総塚古墳	福島県	白河市	後円	？																		
29	神谷作 101 号墳	福島県	いわき市	？	？																		
30	神谷作 202 号墳	福島県	いわき市	？	？																		
31	沼之内 102 号墳	福島県	いわき市	円	？																	後半	
32	高松 1 号墳	福島県	相馬市	後円	21																		
33	鬼穴 1 号墳	福島県	矢吹町	円	27																		
34	牛転 1 号墳	福島県	いわき市	円	？																		
35	後田 2 号墳	福島県	いわき市	後円	？																		
36	土矢倉 2 号墳	山形県	上山市	後円	17																		
出土古墳（遺跡）数合計						31	17	3	10	3	3	1	2	3	7	19	15	1	3	7			

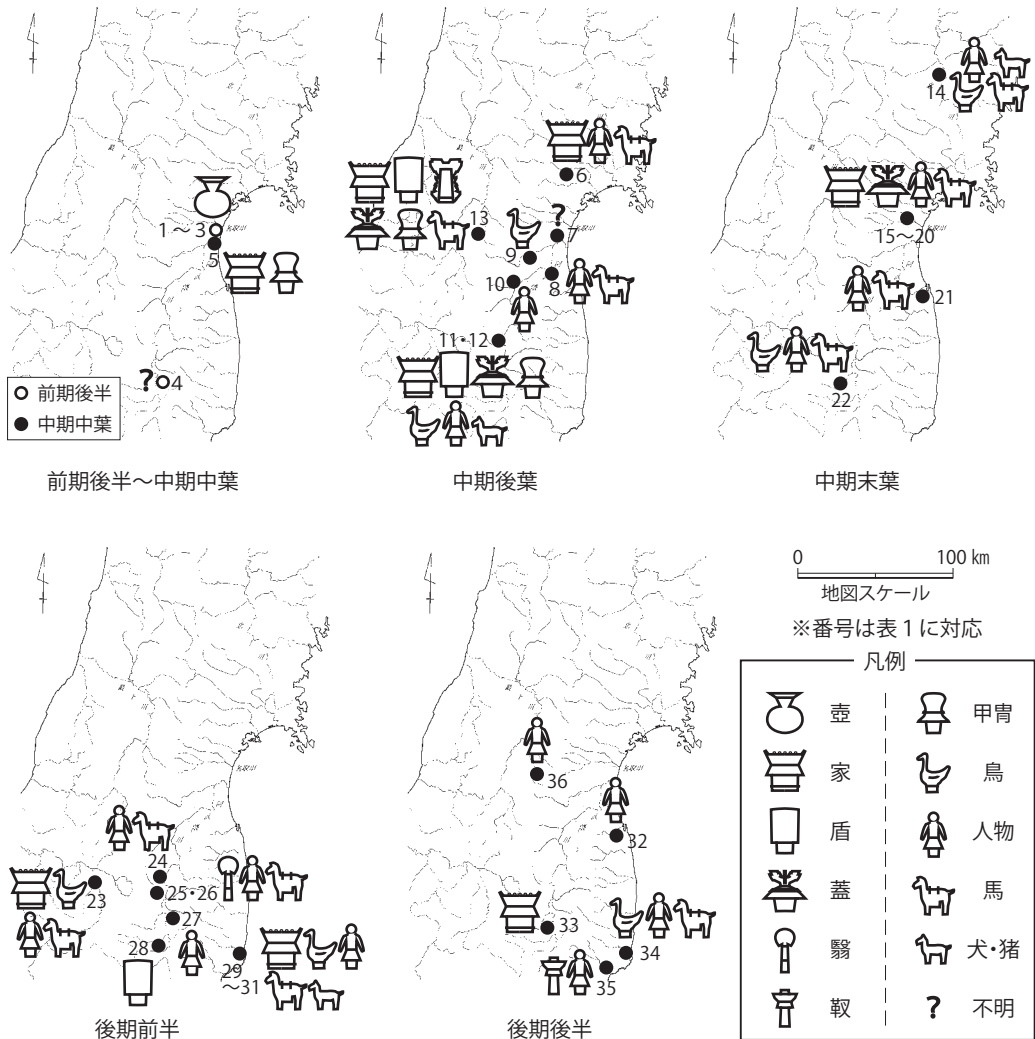


図1 東北地方における形象埴輪の分布

中期中葉 中期中葉に位置付けられる資料も極めて少なく、現状では経の塚古墳のみであり、家形埴輪と甲冑形埴輪の出土が知られている。家形埴輪は寄棟造の形状をとるが、非常に小型であり、粘土紐を巻き上げて屋根部を製作するという点で他に類例がほとんど認められない特徴的な資料となる。甲冑形埴輪は、前面および背面に半環状の突起が付き短甲から草摺を一体で表現したもの、頸甲と肩甲から短甲および草摺までを一体で表現し胴部に水平方向の突帯が巡るものの二者があり、これらも類例に乏しい。円筒埴輪は最下段が全体の高さの半分以上を占め、口縁端部及び突帯端面に刻み目を施すという特徴的な様相を示す。これらが経の塚古墳の形象埴輪全体の様相を示しているかどうかは不明なものの、当該期の王権中枢部において一般的に認められる蓋形埴輪や盾形埴輪を含まず、甲冑形埴輪を配置した点は特徴的である。

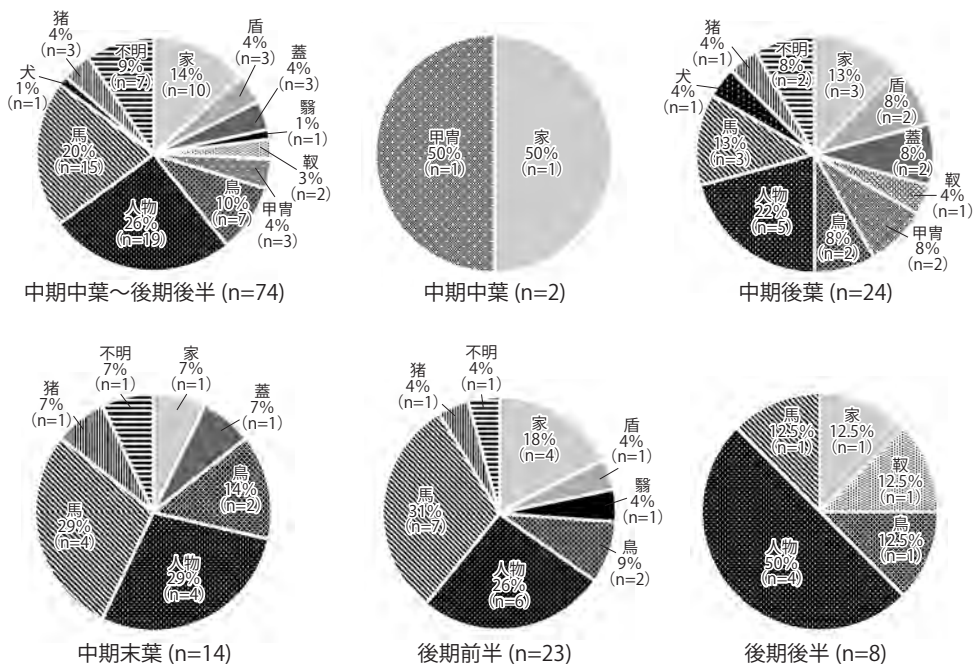


図2 各時期における形象埴輪の比率

なお、円筒埴輪の口縁端部あるいは突帯端面に刻み目を施す一群が群馬県域にあること、経の塚古墳と同様に長持形石棺がお富士山古墳（群馬県伊勢崎市）でも出土していることから、経の塚古墳の埴輪は群馬県域の製作者集団の影響のもとに生産された可能性が指摘されている（藤沢・大橋 2023）。このうち、白石稲荷山古墳（群馬県藤岡市）では家形埴輪と甲冑形埴輪が出土しており、経の塚古墳の形象埴輪組成と同じとなる。ただし、経の塚古墳と白石稲荷山古墳では、形象埴輪の形態的特徴が大きく異なる。製作者集団が同一であったというわけではないものの、円筒埴輪の特徴を含めて影響関係は認めてよいだろう。中期前葉から中葉にかけて東北地方では古墳築造自体がかなり低調であり（辻 1989、藤沢 1996）、それと連動して埴輪生産自体も低調となる。独自色の強い埴輪が生み出された背景にはこうした古墳の築造動向が関連していると想定できる。

中期後葉 古墳築造数の増加とともに、埴輪配置古墳数も増加し、形象埴輪が多様化することも特徴である。家形埴輪、盾形埴輪、蓋形埴輪、韃形埴輪、鳥形埴輪、人物埴輪、馬形埴輪、犬形埴輪、猪形埴輪といった各種の形象埴輪が生産され、畿内の王権中枢部とほぼ同様の器種が生産された。

ただし、一古墳でそれらが完備されるものは現状ではなく、天王塚古墳あるいは菅沢2号墳でそのうち6～7種類が確認された以外は、2ないしは1種類の形象埴輪が確認されるのみであり、一古墳での形象埴輪の保有状況は王権中枢部と比較すると圧倒的に少ない。菅沢2号墳

では王権中枢部と類似する円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土し、菅沢2号墳および天王壇古墳とともに円筒埴輪の外面調整にB種ヨコハケが確認できるなど、いずれも畿内の要素を有する。一方、形象埴輪の製作技術や形状、文様などの特徴をみた場合、王権中枢部とは異なる点が多く、王権中枢部の埴輪生産を志向しながらも東北地方に至る過程でいずれかの地域を経由したことなどが想定される。ただし、台町103号墳で出土した人物埴輪は顔面を粘土紐の巻き上げによって製作するという畿内的な製作技術に基づいており、円筒埴輪にも外面調整のB種ヨコハケや突帯の押圧技法など王権中枢部でみられる製作技術が導入されている。

中期後葉には宮城県域、福島県域さらに山形県域と広域に形象埴輪が展開するようになり、古墳築造数の増加に伴って形象埴輪の配置も各地に展開したと捉えられる。特に人物埴輪の占める割合が他の形象埴輪に比べて比較的高く、当該期の王権中枢部で古墳へ配置されるようになった人物埴輪がほとんど時間差なく東北地方でも受容されたことは重要である。ただし、王権中枢部からの直接的な波及というわけではなく、円筒埴輪の様相からは関東地方などから波及した可能性が高い。

中期末葉 富沢窯のように一つの生産地から複数古墳へ埴輪が供給される拠点継続的生産体制が整い（東影 2023）、それとともに埴輪を配置する古墳数も増加した。ただし、富沢窯が埴輪を供給したその周辺で形象埴輪が集中して確認される以外には、岩手県域と福島県域に数例が点在するのみである。そのため、各地で形象埴輪生産が盛行したとはいえ、前代の中期後葉に比べて限定的な様相を示す。また、形象埴輪に占める人物埴輪と馬形埴輪の割合がともに約30%と増加し、古墳での配置における主要な器種となった。

器財埴輪の出土数は前代に比べて大きく減少し、家形埴輪と蓋形埴輪が富沢窯の周辺で認められるのみである。なお、大野田11号墳から出土した家形埴輪は、非常に小型の寄棟造となり、壁に楕円形の透孔を設けて窓を表現する特徴的な資料である。その形態的特徴は中期中葉の経の塚古墳の家形埴輪に通じるものがあり、地域色と位置付けられる。

丸塚古墳からは、多種多様な人物埴輪とともに馬形埴輪が出土しており、その特徴からは関東地方の影響を読み取ることができる。一方、円筒埴輪は須恵器系埴輪であり、東海地方などの影響によって生産されたと想定される（東影 2009）。形象埴輪と円筒埴輪にそれぞれ異なる系譜が想定されるのであり、東北地方の埴輪生産組織像を考えるうえで重要な資料である。

後期前半 関東地方と類似する傾向がさらに強まるのが後期前半である。器財埴輪が大幅に減少し、盾形埴輪と翳形埴輪がそれぞれ1例ずつ認められる以外に器財埴輪は現状では認められない。後期前半の王権中枢部では依然として各種器財埴輪の生産が盛行することから、こうした東北地方での傾向は王権中枢部とは異なる地域的特色と捉えることができる。一方、人物埴輪と馬形埴輪の配置割合の高さは、中期末葉から継続する。後期前半の各種形象埴輪に占める割合は、人物埴輪と馬形埴輪がともに約30%前後となる。特に形象埴輪が確認された9例の

うち6例で両者が共伴し、一古墳での共伴事例が前代に比べて大幅に増加する。

神谷作 101 号墳から出土した「天冠をつけた埴輪」と呼称される胡坐像の男性埴輪は、顔面が板状粘土を貼り付けることで表現されており、こうした製作技術は関東地方で盛行する。なお、後期前半の形象埴輪は、現状ではそのすべてが福島県域において認められ、中期末葉までにみられた広域展開の様相からは大きく転換する。宮城県域での埴輪生産が前代に比較して低調となったことも関連していると想定されるが、上記した関東地方との関係の強化に伴い、関東地方により近い福島県域に形象埴輪が多く展開するようになった結果とみられる。

後期後半 埴輪生産そのものが低調となっていくが、埴輪を配置する古墳も少数ではあるが残存している。前代と同様に器財埴輪の生産は低調であり、現状では鞍形埴輪が1例認められるのみである。一方、前代と同様に人物埴輪の生産は多く、全体の古墳数そのものは少ないものの後期後半の形象埴輪を出土する古墳5例のうち4例で人物埴輪が認められる。馬形埴輪の生産は一転して低調となり、1例が確認されるのみである。

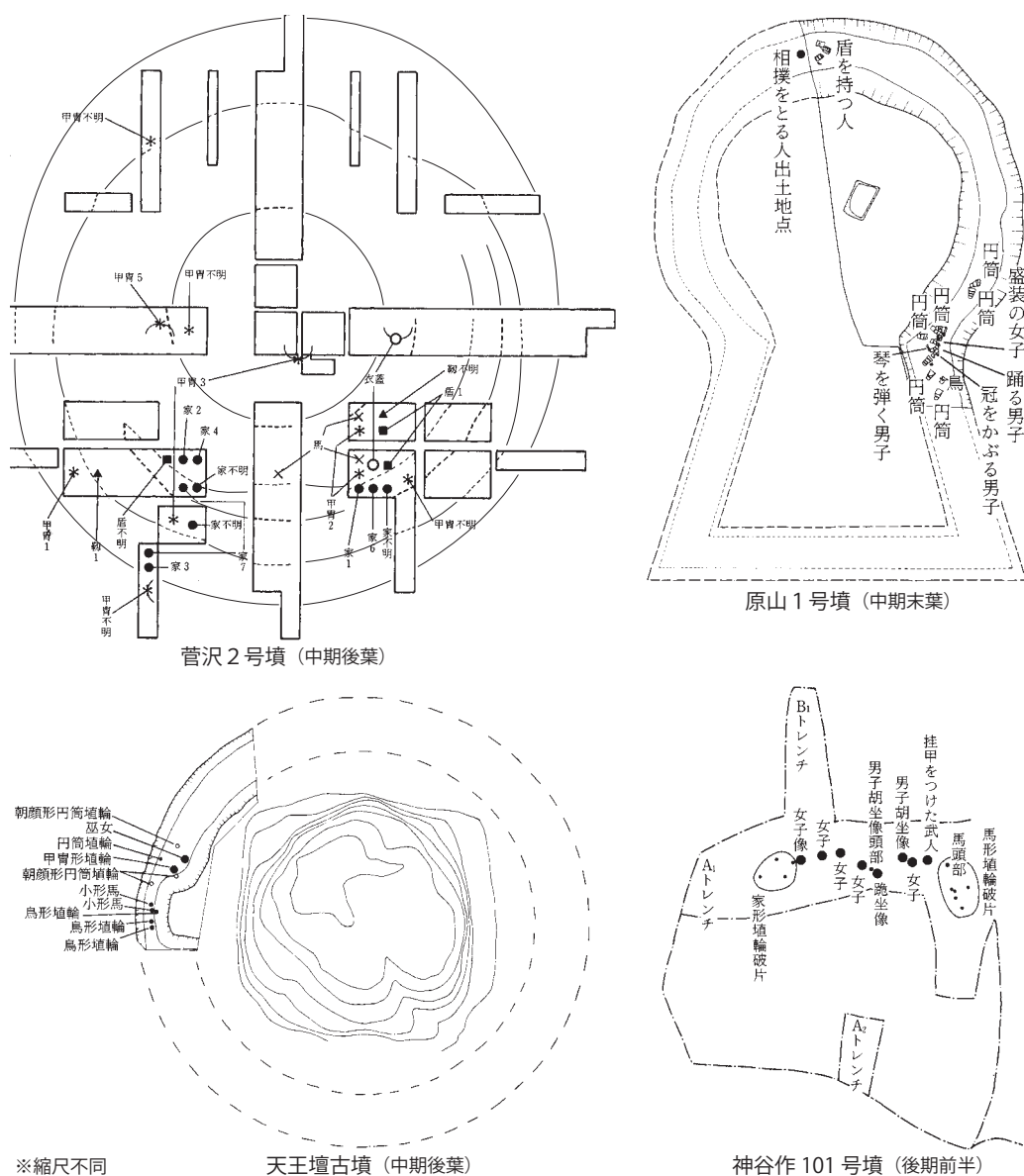
なお、形象埴輪の展開は前代同様に福島県域を中心とするが、1例のみ山形県域でも確認できる。後期後半には王権中枢部でも埴輪生産は低調となり、日置荘窯（大阪府堺市）での生産、藤ノ木古墳（奈良県斑鳩町）や珠城山3号墳（同桜井市）などで埴輪が配置されるものの、埴輪生産そのものが限定的となり、形象埴輪の種類も限られたものとなる。人物埴輪の特徴などからは、東北地方の当該期の埴輪生産は依然として前代と同様に関東地方の影響が強い。

2. 埴輪配置の様相

東北地方における形象埴輪配置古墳の発掘調査事例が少ないこと、また発掘調査によっても形象埴輪の配置が原位置で確認できない事例もあることから配置状況が判明している資料は少ない。しなしながら、限定的ではあるものの形象埴輪の配置状況が判明する古墳もあり、ここではそれらを元にその様相を検討していく（図3）。

中期後葉では、造り出し付円墳である天王壇古墳および台町 103 号墳において、造り出し付近の周溝内から形象埴輪が出土しており、ともに造り出し上の人物埴輪や馬形埴輪を含む形象埴輪配置が想定される。円墳の菅沢2号墳では、墳頂あるいは墳丘段築のテラス面のいずれかに形象埴輪を配置したとみられているが、形象埴輪片が墳丘の片側に比較的にまとまって出土する傾向にあることから、墳頂のみならずテラス面への配置の可能性も考えられる。

中期末葉では、前方後円墳である角塚古墳において配置痕跡そのものは確認されていないものの、前方部側から人物埴輪や馬形埴輪などの形象埴輪が出土している。前方部には段築が認められないとされていることから、墳頂あるいは墳丘外側での配置と想定される。同じく前方後円墳である原山1号墳では、後円部の墳丘主軸上周溝内から盾持ち人と力士、くびれ部の周



溝内から男子・女子の各種人物埴輪と鳥形埴輪が出土している。

後期前半では、前方後円墳である麦塚古墳において翳などの器財埴輪片が後円部側、人物埴輪と馬形埴輪片がくびれ部から前方部側の周溝で出土している。円墳である経塚 1 号墳では、周溝の比較的 1 箇所ですらまとまって形象埴輪が出土する状況が確認されている。また、前方後円墳の可能性が想定される神谷作 101 号墳では、前方部と想定される部分で列状に配置された家形埴輪、男子・女子の各種人物埴輪、馬形埴輪が出土している。こうした列状配置については、

関東地方で盛行することが知られるが、それらは今城塚古墳（大阪府高槻市）の内堤上で確認された形象埴輪配置と関連する（高橋 2004）。神谷作 101 号墳の形象埴輪配置についても同様に今城塚古墳と概ね一致する方向性であることが指摘されている（犬木 2007）。前述したように、神谷作 101 号墳の人物埴輪は関東地方と共通する特徴を有しており、こうした配置は関東地方を經由して東北地方へもたらされたと考えられる。

3. 王権周縁部における埴輪生産の動向

東北地方においては、前期には東海地方に系譜を有する松林山系列の影響が想定され、中期中葉には関東地方に緩やかながら系譜を引く東北地方独自の埴輪が生産された。中期中葉になると天王塚系列にみられる円筒埴輪の外面調整B種ヨコハケや台町 103 号墳にみられる突帯の押圧技法と人物埴輪の製作技術、菅沢 2 号墳の円筒埴輪と各種形象埴輪といった畿内の王権中枢部の要素が認められるようになる。こうした要素は、王権中枢部から関東地方など他地域を經由してもたらされた。また、中期末葉には須恵器系埴輪が出現しており、東海地方の影響が想定される。このように中期後葉から末葉にかけて、複数の地域の系譜を引く埴輪が出現する。中期後葉には各地で前方後円墳や大型の円墳などが築造されるようになり、その中でも特に規模の大きな古墳への形象埴輪配置が進むが、中期前半の古墳築造および埴輪生産の低調さがこうした他地域に系譜を有する埴輪の導入の背景にあると考えられる。中期後葉の古墳築造と埴輪生産の再興にあたって、他地域から技術導入を積極的に進めたのである。

ところで、中期末葉から後期前半の形象埴輪組成の特徴として、人物埴輪と馬形埴輪の占める割合の大きさを指摘できる。また、王権中枢部では前方後円墳のみならず中小規模の古墳でも通有に認められる盾形埴輪と蓋形埴輪を配置した古墳の割合が低いことも東北地方の特徴といえる。盾形埴輪と蓋形埴輪ほどではないものの、家形埴輪もそれほど普遍的ではない。東北地方において人物埴輪と馬形埴輪の占める割合が高くなるという傾向は、中期後半から後期の関東において人物埴輪と馬形埴輪が盛行すること（杉山 1996）と強く関連している可能性が高い。原山 1 号墳から出土した人物埴輪は、亀塚古墳（東京都狛江市）や新屋敷 C35 号墳（埼玉県鴻巣市）との共通性が非常に高く、また天王塚古墳出土の円筒埴輪はその系譜が関東地方の武蔵地域に認められることが指摘されている（藤沢 2002）。原山 1 号墳の人物埴輪のうち、「弓を乗せた鞆を担ぐ男性半身立像」とされる類例の少ない人物埴輪が、亀塚古墳においても確認されること（小栗 2020）を考え合わせると、製作者集団の直接的なつながりを想定することも可能であろう。このように、関東地方での形象埴輪の生産動向が東北地方に直接的あるいは間接的に影響を与えた可能性が高い。中期末葉まで東北地方南部の各地で認められた形象埴輪の展開が、後期前半には関東地方に地理的に近い福島県域へと集中するという点も、上記した

関東地方からの影響と相関する現象といえよう。後期後半には埴輪生産そのものが低調となるが、後期前半と同様に関東地方の影響が依然として強いことが読み取れる。

おわりに

本稿では、形象埴輪の器種組成と古墳での配置を元に王権周縁部と位置付けられる東北地方の様相を検討してきた。東北地方の埴輪生産の大きな特徴として、他地域に系譜を有する埴輪が各地に点的に展開することが指摘できる。一方、地域独自の埴輪生産は、経の塚古墳を除きほぼ認められない。尾張地域あるいは関東地方の埴輪のように地域内で面的に展開する埴輪生産が基本的には行われないことも東北地方の特徴である。仙台平野では富沢窯において拠点継続的生産が行われたものの、その供給範囲は限定的であり、広域かつ面的に展開する地域の特徴を有する埴輪生産とはならない。埴輪製作者集団の存在形態、ひいては古墳築造に伴う労働力編成が埴輪生産の盛行する他地域とは異なっていた可能性がある。古墳の築造ごとに単発的に埴輪が製作された個別的生産を中心とするあり方は、王権中枢部での前期の様相あるいは尾張地域や関東地方での中期前半までの様相と類似する。東北地方においては一貫して古墳の築造数そのものが少なく、埴輪生産もその都度ごとに他地域からの技術的導入を図ることがより合理的なあり方であったと想定されるのである。

註

- (1) 表面採集のみによって埴輪が確認された古墳も比較的多いことから、現在は円筒埴輪の存在だけが知られる古墳でも今後の発掘調査によって形象埴輪が確認されることもあると考える。ただし、その数が飛躍的に増加した場合を除き、ここで示す傾向に大きな変更はないとみている。
- (2) 表1掲載の古墳・遺跡の所在地は本文中に記さず、非掲載のもののみ本文中に所在地を記す。

引用・参考文献

- 犬木 努 2007「形象埴輪「列状配置」の本義―「今城塚」から東国の埴輪を考える―」『志学台考古』第7号 大阪大谷大学文化財学科、大阪：pp. 1-21
- 今津節生・辺見理香（編）1988『東国のはにわ』福島県立博物館、福島
- 小栗明彦 2020「武器を担ぐ男性埴輪考―「胡弓弾埴輪」説の撤回―」『埴輪論叢』第10号 埴輪検討会、奈良：pp. 135-146
- 菊地芳朗・菅野和恵 2022「東日本における前期埴輪の成立と展開―福島県須賀川市団子山古墳を中心に―」『日本考古学協会第88回総会研究発表要旨』日本考古学協会 東京：p. 22
- 杉山晋作 1996「東国の人物埴輪群像と死者儀礼」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集 国立歴

- 史民俗博物館、千葉：pp. 31-50
- 高橋克壽 2004「埴輪まつりのうつりかわりと今城塚古墳」『発掘された埴輪群と今城塚古墳』高槻市立しろあと歴史館 大阪：pp. 56-64
- 辻 秀人 1989「東北南部における埴輪工人の動向」『地方史研究』第39巻第4号 地方史研究協議会、東京：pp. 18-28
- 東影 悠 2008「東北地方における埴輪生産の系譜」『古代文化』第60巻第1号 古代学協会、京都：pp. 117-126
- 東影 悠 2009「東北地方における須恵器系埴輪の展開」『宮城考古学』第11号 宮城県考古学会、宮城：pp. 127-140
- 東影 悠 2011「東北地方における埴輪製作技術の導入と展開」『シンポジウム〈もの〉と〈わざ〉』第16回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会、千葉：pp. 83-94
- 東影 悠 2023「関東・東北の埴輪生産遺跡と供給圏」『埴輪生産からみた地域社会の展開』六一書房、東京：pp. 321-328
- 廣瀬 覚 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社、東京
- 藤沢 敦 1992「東北」『古墳時代の研究』第9巻古墳Ⅲ埴輪 雄山閣、東京：pp. 21-28
- 藤沢 敦 1996「仙台平野における古墳の変遷—その断絶と画期をめぐって—」『甘粕健先生退官記念論集—考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会、新潟：pp. 237-254
- 藤沢 敦 2002「東北地方の円筒埴輪—窖窯焼成埴輪の波及と生産—」『埴輪研究会誌』第6号 埴輪研究会、千葉：pp. 17-42
- 藤沢 敦 2003「東北地方の円筒埴輪—技法・系譜・伝播—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会、兵庫：pp. 315-330
- 藤沢 敦・大橋 葵 2023「経の塚古墳と東北の埴輪」『国家形成期におけるヤマト政権と地域権力の相互関係の再定義—東北地方を中心に—』令和2～4年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 福島大学行政政策学類、福島：pp. 35-44
- 柳沼賢治 2023「福島県中通り地域の古墳と集落—前期を中心に—」『国家形成期におけるヤマト政権と地域権力の相互関係の再定義—東北地方を中心に—』令和2～4年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 福島大学行政政策学類、福島：pp. 15-24

挿図出典

表1、図1・2：筆者作成

図3：菅沢2号墳 山形市教育委員会1991『菅沢2号墳』を一部改変、天王壇古墳・原山1号墳・神谷作101号墳 今津・辺見編1988を元に筆者作成